

『知的障がい者(自閉症を含む)を対象とした,
強度行動障害への支援の検討』
～米国の学校を事例として～



2023 年度(採択)
松の花基金助成金対象事業

一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会
会長 斎藤 利之(代表申請者)

令和 6 年 4 月 20 日

報告書

申請者	一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会 会長:斎藤 利之
プロジェクト名 (日本語)	『知的障がい者(自閉症を含む)を対象とした, 強度行動障害への支援の検討』 ~米国の学校を事例として~
プロジェクト名 (英語)	'A review of support for intense behavioural disorders for people with intellectual disabilities (including autism)'. ~A case study of a school in the United States of America~.
期間	令和 6 年 4 月 1 日(月)~令和 6 年 4 月 5 日(金)
必要機材	ボイスレコーダー1台 スマートフォン(写真撮影)

【スケジュール】

月/日(曜日)	時間	内容
4/1(月)	16:00 18:25 18:15 19:30	成田空港へ集合 JL008 成田発 ボストン到着 ホテルへ移動(途中夕食)
4/2(火) 助成金対象調査	07:00 07:30 07:50 08:00 08:30 09:30 12:30 14:00 14:30 15:30 17:30 18:00 20:30	朝食 移動～ボストン東高校 ボストン東高校着 ショート MTG 体育の授業(ジョギング)見学 MTG(ヒヤリング)開始 ランチ MTG 移動～ホテル 休憩 チーム MTG① ※振り返り(ヒヤリング事項確認) 移動～ディナー 公式ディナーMTG(ボストン東スクールの教師合流) 移動～ホテル
4/3(水) ※助成金対象調査外	08:00 09:00 09:15 09:50 10:00 12:30 14:00 17:00 17:30 18:00 20:30	朝食 チーム MTG② ※本日の MTG の確認 移動～ Charlstown High Charlstown High School 着 MTG(ヒヤリング)開始 ※性教育 移動～ランチ 観光(ハーバード大学, MIT 等) チーム MTG③ 移動～ディナー 公式ディナーMTG(IMPACT:Boston の Executive Director 合流) 移動～ホテル
4/4(木)	08:00 09:00 10:00 11:00 13:20	朝食 チーム MTG④ 移動～ボストン空港 ボストン空港着 JL007 ボストン発
4/5(金)	16:15	成田空港着 解散

【調査1】

調査場所	<p>ボストン東スクール</p> <p>●ADD: Boston Higashi School Address: 800 North Main Street Randolph, MA 02368</p> <p>●Phone: 781-961-0800</p> <p>●Fax: 781-961-0888</p>
面会者	<p>Michael Kelly⇒Executive Director</p> <p>John Maina, Ph.D⇒Director of Programming</p> <p>Takako Ebihara⇒ Director of Special Education</p> <p>Heather Katz,⇒Director of Training</p> <p>Erin Youhas⇒ Psychiatric mental health Nurse Practitioner</p> <p>Hideyuki Nishizawa⇒ Director of Leisure/Recreation Development</p> <p>Hilary Holmes⇒Mental health Clinician</p>
事業（研究）の実施経過及び目的	<p>【実施までの経過と今後】</p> <p>令和5年8月上旬 のぞみの園と調整</p> <p>令和5年8月中旬 受け入れ先(Boston Higashi School)との調整</p> <p>令和6年4月上旬 現地視察</p> <p>令和6年7月中旬 中央大学保健体育研究所(表題提出)</p> <p>令和6年4月～12月 論文執筆開始</p> <p>令和7年1月上旬 中央大学保健体育研究所(論文提出)</p> <p>令和7年6月中旬 中央大学保健体育研究所(紀要出版:発表)</p> <p>【本番時】</p> <p>午前8時～午後2時(途中ランチミーティングを含む)</p> <p>および公式会食時によるディナーミーティング</p> <p>【目的】</p> <p>本研究は、国内に約8,000人いるとされている強度行動障害を有する方々の処遇改善(制度上)を図る為のものではなく、社会福祉法人等の施設においてスポーツ活動や集団行動などの身体的な活動が、当事者にとって良い影響をもたらすのではないかとこの仮説に立ち、それらを実施している海外の学校等に赴き、国内における積極的な導入の可能性を探ることを目的としている。</p> <p>具体的には、強度行動障害児を積極的に受け入れている“自閉症児のための教育機関”である、ボストン東スクールを訪問し、米国の特別支援教育制度の中で、強度行動障害児への対応を、長年にわたり、独自の教育方針で、どのように実践しているのかを同校の教職員から直接ヒアリングを行い、世界各国の特別教育を比較するための基礎資料とする。さらに、スポーツが強度行動障害を改善する可能性を探る。</p>

<p>実施内容および 成果</p>	<p>【調査対象学校の概要】</p> <p>武蔵野東学園(東京都武蔵野市)の取り組みを米国に移出するため、同学園の創始者(Dr.北原キヨ)が、レキシントンというタウンにある、当時使用していなかった学校の建物の半分を借りて運営(創立当時)していた。その後、レキシントンに住む、公立学校に入学または転校を含む学齢児の数が増えたため、1994年に、現在のランドルフに移った(この場所は、元々、シスターが聴覚障害者を養育するための施設の一部を借りる形で教育を行っていたが、聴覚障害児教育が縮小していく一方、逆にボストン東スクールが徐々に児童・生徒、教職員が増え、施設を拡充が必須となったため、シスターらと交渉の上、ボストン東スクールが単独で使用することになった)。また、その頃の寮はネイティックというタウンにあり、寮がこのキャンパスに移ったのは、その3年後になる。</p> <p><教職員・生徒数等(2024年4月時点)></p> <ul style="list-style-type: none"> ●教職員 約300名(出身国は21か国) ●在校生178名(寮生:96名/通学生:82名) <p>対象児の年齢は3歳(就学前)~22歳(米国の特別支援教育終了年齢)までで、法で定められている公立のインクルージョン教育では対応のできない児童生徒が対象となっている。対象児は自閉症スペクトラム障害を持っている生徒および他の疾患(ADHDなど)を合併している場合もある。</p> <p>【教育・療育の理念】</p> <p>武蔵野東学園(前掲)で開発・展開された Daily Life Therapy®(以下 DLT)を基本とし、創始者 Dr.北原キヨの「子どもを自国の文化やことばの中で教育する」との考えの下、米国の実情にも考慮した教育が行われている。当初は、この DLT を実施するため、日本の武蔵野東小学校3年生(30名)をボストンに短期留学させ、ボストン東スクールの生徒に対し、集団教育のお手本として、当校の基盤を作りあげた。現在においても、授業開始前後の挨拶、集団行動など、日本の伝統的な学校教育スタイルも残している。また、様々な背景を持つ教職員の長所(能力)を授業に取り入れている。例えばアフリカ出身の教員は、アフリカ独特のリズム感、身体の動きなどが教育に生かされる。このように、ボストン東スクールでは、日本をはじめ様々な国々から来た職員が、それぞれの文化をうまく融合させた教育を理想としている。</p> <p>また、同校の最も基本的な教育上の柱である「生活療法の3本柱」とは・・・</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 体力づくり(physical stamina building) ② 心づくり(Emotional stability) ③ 知的開発(Intellectual stimulation). <p>であり、日々のジョギング(写真参照)は体力づくり、心作り(頑張る気持ち)の一部として長年実施している。</p>
-----------------------	--

また、一般的に自閉症児の教育では、通常、応用行動分析(ABA:以下斜体)がよく行われている。

1930年代にアメリカの心理学者スキナー(B.F.Skinner)が始めたABAは、不適切な行動に関して、それが起こった原因を本人のみに帰するのではなく、周りの環境の相互作用の中から問題行動の解決策を見出すその行動を行った理由を考えていくもので、1960年代に、UCLAのロバース(O.I.Lovaas)が早期自閉症療育にABAを応用する研究を始めてから広がっていった。

<ABA(応用行動分析学)とは?>

ABAは、行動がどのように機能するかについての理解を実際の状況に適用する。目標は、役立つ行動(以下参照)を増やし、有害な行動や学習に影響を与える行動を減らすことが期待できる。

- 言語能力とコミュニケーション能力の向上
- 注意力・集中力・社会的スキル・記憶力・学業力を向上させる
- 問題行動を減らす

また、ある行動の後に評価されるもの(報酬)が続くと、人はその行動を繰り返す可能性が高くなる。時間の経過によって、前向きな行動の変化を促す。

そこで、同校の教育の実際・・・

自閉症児に共通してみられる特徴に、他者とコミュニケーションに興味を示さず、特定の物事に強くこだわり、関心のないことには全く見向きもしない。そのため、自閉症児の教育の経験がない親が、排泄、食事、着替え、就寝などの基本的な生活習慣を身につけさせようとしても不可能であることは自明である。そのため、こうした特徴を持つ自閉症児に対する社会的自立に向けた教育法として「生活療法(再掲)」と名付けた手法を取り入れている。たとえば、睡眠障害については、日中の様々な運動プログラムで体力を発散させ、その後、就床時刻まで集団によるルーチンを行うことで就寝に持っていく。同校スタッフによれば1か月ほどで生活リズム、睡眠習慣が身につくことであった。もちろん個人差があるので、ケースによっては精神科専門看護師の資格を持つ専任ナースによる、薬物のバランスを考えた薬投与を選択することを前提に、臨機応変に対応している。また、生活リズムが整うと情緒が安定し、集中力や忍耐力も身につく。そうするとその次の段階である“周囲に関心”が向き、協調性と自発性が育まれることになり、この段階に至ると教師による教科学習の指導も可能となる、とのことである。この一連の指導を「生活療法」と呼ぶが、要点は、自閉症児に過度なストレスとなる「できないこと」への矯正的訓練ではなく、時間をかけ「できること」を少しずつ増やし、達成感、自己効力感を感じさせ、さらに次の課題に取り組みさせることにある。このように、十分に介入できる寮生96名に対する効果は十分にあげているが、一方、

通学生86名に関しては、当然保護者との連絡を密にしているものの、実際には家庭での養育には限界がある、とのことであった。

【考察】

ボストン東スクールの敷地の広大さおよび設備の充実に圧倒された。また、米国における障害児教育は全て学校区から費用が捻出され、つまり、そのタウンに住んでいる人たちの税金によって賄われている。また、公立の学校外で教育を受けている生徒に関しては、Department of Early and Secondary Education(教育省)から公的に認定された学校の生徒がこの対象になる。因みに、2024年の7月からのOperational Services Division(学費を設定するマサチューセッツ州の機関)のtuitionは以下の通りである。

- 通学生: \$96,679.14/年
- 寮生: \$284,211.17/年

一方,IEP(Individual Education Program)は,全て,生徒のエバリュエーション(査定)の結果から次のステップへと指導が行われる。尚,全ての学校で IEP を書くのが義務付けられているが,多くの場合,SLP, OT, PT などのセラピーが組み込まれている。障害児教育の一般的な療法として,これらスペシャリストによるプルアウト方式が主流あり,1対1で一回 15 分もしくは 20 分程度のセッションが,週に2回,3回繰り返されている。しかし同校では,このプルアウト方式ではなく,生徒たちの普通の教育の現場にスペシャリストが入る,“プッシュイン方法”を採用しており,どのようなサポートをすれば生徒たちの助けになるかを,スペシャリストが担任の先生たちにアドバイスし,1日を通して活用する(15分や20分ではない)と言うものである。

更に,同校の IEP は Behavior/self nregulation, Communication, Daily Living Skills, Academics, Music Education, Art Education PE Education. Emp Education は, younger high ~Emergence Division までである。暴れたから罰というのではなく,自分で自分のコントロールができるように指導している。そして,少しでも本人ができるようになれば,先生の介助を外していくという指導を行っている。

その他,全てのクラスにおいて時間割が視覚化されており,基本的なトイレ,水,保健室,help などの要求に関して絵カードを使っているのもその一部である。クラス授業の際,鉛筆の握り方,椅子と机の高さの調整,図工の時間のクレヨン(クレヨン)の握り方や点と点を結んだり直線を縦や水平に描くこと,更には体操や自転車,ポゴスティックを教えているのも,生徒の生活の中で活かせるような工夫がされている。

特に,直線描きや体操器具の使用については,もともと Dr.北原キヨの「生活療法」に

	<p>において実践されてきたものだが、スペシャリストを通じ、改めて検証(実証)された事案でもある。</p> <p>ただ、課題としては、教育支援が終了する22歳に達した生徒の将来についてである。これについては、教員の一部がNPO法人を作って彼らの活動場を提供しつつある。また、児童生徒自らが、同校内の学食の配膳を手伝ったり、レストランの模擬受付など、卒業後に自分が獲得したスキルがそのまま役に立つような取り組みを構内で積極的に実施している、今後の更なる展開・発展に期待したい。</p>
<p>今後予想される効果</p>	<p>具体的には、日本国内になる社会福祉法人内でボストン東スクールが実践するカリキュラムを参考に実際に実践して頂き、実践前後で当事者の「睡眠の質」などを測定することにより、その効果を確認することが可能であると考えている。また、学校現場へのフィードバックに関しては、当協会の協力会員でもある「全国特別支援学校知的障害教育校長会(全知長)」へご協力を依頼し指導書等を作成する等を行い、最終的には、直接的な形で知的障がい児者へアプローチを図り、計画性をもって進めていく。</p> <p>もう一つの視点としては、同校が実施する集団教育:Daily Life Therapy®に着目しており、スポーツ活動の持つ特性が、これまで強度行動障害の症状を持つ方の対処・対応として着目されて来なかった点を鑑み、そのような活動が同症状軽減に寄与し、自分への気づきが生まれるという好循環を醸成する一助となることを期待し、独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園(以降、のぞみの園:群馬県高崎市寺尾町2120番地2)と協力・連携しながら問題の解決にあたりたい。</p>
<p>本事業(研究)により作成した印刷物(研究報告書等)</p>	<p>尚、上記結果を踏まえ、今後関連する先行文献などを調べ、2025年1月に中央大学保健体育紀要に投稿予定(発刊予定日:2025年6月~7月頃)。</p>

〔活動の様子（写真）〕

	
<p>打ち合わせ風景①</p>	<p>打ち合わせ風景②</p>
	
<p>校舎外観</p>	<p>創立者銅像（D r . キヨ（左））</p>
	
<p>学食</p>	<p>朝のジョギング風景①</p>
	
<p>組体操</p>	<p>朝のジョギング風景②（教師も）</p>